

京都大学	博士 (工学)	氏名	早川 小百合
論文題目	シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレの「都市の構築」における都市形態論とその思想的背景		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、のちに 20 世紀を代表する建築家ル・コルビュジエ (1887-1965) として知られることになるシャルル＝エドゥアール・ジャンヌレが青年期に執筆した草稿「都市の構築 La Construction des villes」(1910-1915) を対象に、論述内容の分析と考察を行ったものである。この草稿は、ジャンヌレの故郷であるスイスの小都市ラ・ショー＝ド＝フォンの都市改造の提案に向けられたもので、都市の構成要素ごとに様々な形態が列挙され、その優劣が評価されている。しかし未完成の草稿であるため、論述はかならずしも十分に整理されていない。また、その内容は約 10 年後にル・コルビュジエとして提示するモダニズム都市像とは大きく異なり、中世都市を理想とするカミロ・ジッテの影響を強く受けている。本論文ではこうした未解釈の多い草稿の内容を精査し、思想的背景とも照合しながら、ジャンヌレの都市形態論を論理的に再構成することに成功したものである。論文は、序章、本文 5 章、および結章で構成されている。</p> <p>第一章では、草稿に頻出する「パルティ (parti)」の語義を調査した。その結果、元来建築用語であったこの語が都市構成要素の型として使用されていることを明らかにし、草稿が街区、道、広場などの都市構成要素ごとに展開されるパルティ論であることを指摘した。</p> <p>第二章では街区のパルティが取り上げられている。街区のパルティに関する 20 箇所の記述について、それらを形態論的に分析することで、計 10 の街区のパルティを抽出し、これらを中庭型、連続型、独立型の 3 つに大別した。そして、これらに対するジャンヌレのコメントから隠れた評価軸を析出し、実用的観点の 3 つの評価軸と視覚的観点の 4 つの評価軸 (庭の眺望の美しさ、眺望の多様性、ファサードが道に面すること、直角の必要性) があることを示した。とくに視覚的観点の評価軸については、視覚的閉鎖性の希求が前提となっていることを指摘した。</p> <p>第三章では道のパルティを扱っている。計 88 の記述箇所を取り出しその内容を分析することで、36 の道のパルティを抽出し、それらを単独街路、交差点、交差点の反復、道のネットワークの 4 つに大別した。そして道のパルティについては、実用的観点の 3 つの評価軸と、6 つの視覚的・身体的観点の評価軸 (視覚的閉鎖性、眺望の多様性、直角の必要性、大きさの身体性、身体の休息、目の休息) を析出した。また、視覚や歩行といった人体の動きに静止や緩急をもたらす疎密やリズムのある道が推奨され、ここでも視覚的閉鎖性および身体の休息の評価軸が支配的であることを指摘した。そして視覚的閉鎖性が「目の休息 (repos)」をもたらすという思考が、オーストリアの都市計画家カミロ・ジッテらの心理的な視覚的閉鎖性を論拠とし、ドイツの建築家カール・ヘンリチらの身体運動的な観点を重ねて補強されていることを指摘した。</p> <p>第四章では広場のパルティが扱われている。計 70 箇所の記述から 19 の広場のパルティを抽出し、それらを単一の広場と複数の広場に大別している。そして広場のパルティに関しては、実用的観点の 2 つの評価軸と視覚的・身体的観点の 5 つの評価軸 (視認の正確性、視覚的閉鎖性、身体的な大きさ、建物やモニュメントの強調、眺望の多様性) を析出した。そして眺望の多様性をもたらす不整形な平面形状が好まれていた</p>			

京都大学	博士 (工学)	氏名	早川 小百合
<p>こと、また広場内にモニュメントがある場合は、「場所の精神 (l'esprit du lieu)」にもとづいて造形することによって空間の「雰囲気」が明確になり、「親密でより個人的な感情」が誘起されるという重要な考えがあることを示した。さらに、「場所の精神」という語については、それがジッテから導入されたものであり、さらにのちのドイツの建築家パウル・シュルツェ=ナウムブルクや芸術史家アルベルト・エーリヒ・ブリンクマンが論じていた限定された空間における「気分 (独語/Stimmung)」という概念が仏語「雰囲気 (ambiance)」として受容された可能性を指摘している。</p> <p>第五章では、前章までの分析のまとめを行った後、各パルティ論に見られた視覚的・身体的観点からの美的評価軸と実用的評価軸の並立は、ドイツの批評家リヒャルト・シュトライターによる地域主義的なリアリズムの思想に沿ったものであることを指摘している。続いて都市全体のデザイン論については、地形を含めた都市全体を彫塑のように捉え、その「シルエット」を明瞭にし、建築を地面の起伏を考慮して「より親密な関係」をもたらすよう主張されていることを明らかにした。さらに、草稿執筆の究極目的は、都市の美化による美しい情動すなわち「愛郷心 (patriotisme)」の創出であったことを体系的に明らかにしている。この「愛郷心」は、スイスの作家ジョルジュ・ド・モントナックやシュルツェ=ナウムブルクらをとおり、ドイツの芸術教育運動と郷土保護運動を背景に構想されたと考えられることを論証し、「愛郷心」の観念を歴史的文脈の中で位置づけた。</p>			

調査委員 京都大学大学院工学研究科
(主査) 教授 田路 貴浩
京都大学大学院工学研究科
教授 神吉 紀世子
京都大学大学院工学研究科
教授 富島 義幸